



第7795号

2023年5月2日(火)

「熱い心」が聞き手に伝わる

言の葉OFFICEかのん代表 川邊 暁美

◆AIで答弁作成なら失言なし？

第20回統一地方選挙で筆者の地元・兵庫県では、前回(3月14日付)のコメントライナーで取り上げた小野市議会が女性議員数7をキープ(女性比率43.8%)、男女共同参画の意識が高いとされる宝塚市では14人の女性が当選し、女性比率が過半数の53.8%に躍進した。

成り手不足と言われる地方議会だが、「地盤、看板、カバン」を持たない女性や若い世代が参画することで、多様な視点が加わり、市民感覚に添う政策が生まれることを期待している。

市民感覚と言えば、「岸田首相襲撃の報を受けた後、うな丼をしっかりと食べた」とパーティーでスピーチした大臣がいた。危機意識の欠如もさることながら、さまざまな生活必需品の値上がりで頭の痛い庶民からすると、「公務出張先で四万十川の天然うなぎを食べられていいですね」と嫌味を言いたくなってしまった。

国会答弁に対話型人工知能(AI)「チャットGPT」の活用を検討する、と西村康稔経済産業相が述べていたが、AIが作成したら、このような失言もなくなるのだろうか。

◆チャットGPT原稿、見破るのは困難か

チャットGPTに対しては、東京大学などがいち早く「リポートや論文への使用の制限・禁止」を打ち出している。AIが作成した文章を検知するソフトも活用するようだ。

筆者はまだ使ったことがなく、精度の見当がつかないのだが、大学で担当しているプレゼンテーションの授業で、学生がチャットGPTを使って原稿を作成したとしても、読んだだけで、それを見破ることは難しいかもしれない。

ただ、プレゼンテーションは、①声・話し方②話の内容③表情・姿勢—の3要素で評価している。②がAI作であったとしても、①③をチェックすれば、話し手自身の思いが乗ったプレゼンテーションであるかどうかは判断できるはずだ。

◆感情揺さぶる話し方と声の力

筆者が経営者を対象にスピーチやプレゼンの個人指導を行う際、原稿作成から関わる場合は、「対話型」。チャットGPTと同じだ。相手に問い掛け、言葉を引き出しながら、原稿作成をサポートする。

その際、「そんなこと忘れていた」「こんな話は面白くないと思っていた」と、自分ではその価値に気が付いていないエピソードが、指導を受ける人から出てくることがある。その人がそれを思い出して語る時の目の輝きを見、声の弾みを聞いていると、その瞬間、話し手の魂が熱くなっているのが感じ取れる。そのエピソードを表現する言葉と最も効果的な構成を考え、原稿を作成する。そうすると、自然に表情豊かに、生き生きと声と言葉に心を乗せて語ることができるのだ。

実感を伴っていない話し方はいくら文章が素晴らしくても、どこか空々しさがある。

特に声は潜在意識に働き掛ける。言葉に込めた意味を何倍にも増幅させ、聞き手の感情を揺さぶるのは声の力だ。NHKニュースで時々聞くAIの音声も最近はアナウンサーと区別がつかないぐらいになっているが、放送やオンラインではなく、対面で語る場合には、そこに「熱い心」があれば、聞き手には必ず伝わるはずだ。それが感じ取れない聞き手ばかりになったとき、残念ながら話し方講師という仕事はなくなるのだろう。

(かわべ・あけみ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003